

哲学における自由意志問題

—理由応答性説の考察—

西澤 徹臣

大阪市立大学大学院 文学研究科 哲学歴史学専攻

哲学専修 前期博士課程1年生

Keywords: 自由意志, 決定論, 理由応答性, 形而上学

1. はじめに

西洋哲学における自由意志問題は、古代ギリシアの頃からその問題が指摘され、時代によりさまざまな背景（運命論、神学的決定論など）のもとで論争となってきた。とりわけ近代以降では、因果的決定論の想定のもとで自由意志が問われ、現代に至っている。本発表では、自由意志問題がどのようなものであるかを確認し、論争上の一つの立場である理由応答性説について考察する。

2. 自由意志問題とは

私がいま、「右手を上げる」とする。私は自分の意志でおそらく自由に、右手を上げることを選択しそれを実行するのである。しかし、次のように考えてみることもできる。私が右手を上げる選択をすることは、それを選択する時点での世界全体の出来事によって決定されているということである。たとえば、もし右手に怪我をしていれば、右手ではなく「左手を上げる」という選択をするかもしれない。また、もしその時に地震が起きるならば、右手を上げることよりも「避難すること」を選択するはずである。つまり私の選択は、私自身の身体の状態や、周りの物理的条件によって何らかの規定を受けている。そうした私自身の身体の状態や周りの物理的条件は、世界全体の出来事の一部である。そして世界は、おそらく私が生まれる前から存在しており、自然法則にしたがってその歴史を連綿と継続させてきたはずである。

私たちは、自分が生まれる前の世界の状態も、自然法則も、どちらも変えることはできない。現在の世界の状態、あるいは現在の自分の意志や行為が、それに先行する世界の状態と自然法則の結果であるとすれば、自らの自由意志に基づいて選択をする、ということは疑わしくなってくる。なぜなら、それはすでに決まっていることであり、それ以外の選択や行為をする余地はないと考えられるからである。世界のあり方のすべては既に決まっている、という考え方を「決定論」という。もし決定論が正しいならば、私たちには自由意志はない、と考えられるかもしれない。しかし一方で、多くの場合私たちは、自分には自由意志がある、という確信をもっている。決定論による形而上学的議論がどうであろうとも、それを理由に自らの道徳的（あるいは社会的・法的）責任を放棄してしまうことはまずないだろう。私たちが日々営んでいる社

会生活には責任が必要とされ、その責任には自由意志が前提となっているはずである。そこに自由意志がないと言ってしまうことは、どこか空虚なレトリックのようにも感じられる。

自由意志をめぐる哲学はさしあたって、(i) 決定論が自由意志にとって脅威となるとすればどのような意味においてなのか、(ii) それらが私たちの日常的な自由の感覚および、自由意志があることを要件とする道徳的観念や社会的実践とどのように関係するのか、などの問題を扱う研究であるということが出来る。

3. 一つの回答—理由応答性説

「決定論が正しければ、私たちに自由意志の余地はない」。このように言われるとき、何が意味されているのだろうか。一つには、私たちに選択の余地はない、という意味が込められているだろう。決定論が正しいならば、世界の有り様はあらかじめ決まっておき一通りしかありえない。したがって、複数の可能性を前提とするような選択の余地もない、と言うことは理に適っているように思える。では、それをもって私たちに自由意志はないと言えるだろうか。

このような見解を否定するいくつかの立場がある。その一つとして理由応答性説が挙げられる。この説によると、たとえば、右手を上げることが仮に決定論的に決まっているとしても、私たちはその行為を（少なくとも主観的には）自らの理由に基づいて選び、実行することができる。右手を上げることについて、なぜその行為を選択したのかと問われれば、「利き手なので上げやすいからだ」、「気まぐれで決めたのだ」など、何かしら自分なりの理由を挙げることができるだろう。しかしその際、「これは決定論的に決まっているからだ」と答えることはないはずである。理由応答性説において自由意志があるということは、自らの理由に基づいて選択し、行為し、その理由を問われた際に適切な応答ができる状態にある、ということなのである。

理由応答性説は、自由意志を擁護する一つの有力な立場であるが、難点も指摘されている。それらの批判も含め、理由応答性説が維持可能な立場であるかを考察する。

参考文献

Fischer, John Martin and Mark Ravizza (1998) “Responsibility and control: A Theory of Moral Responsibility.” *Cambridge University Press*.

Fischer, John Martin, Robert Kane, Derk Pereboom, and Manuel Vargas (2007) “Four views on Free Will.” *Blackwell*.

Joseph Keim Cambell (2011) 『自由意志』[高崎将平訳] 岩波書店, 2020.